

2. 鹿田遺跡における弥生時代～古墳時代初頭の水田関連遺構

はじめに

鹿田遺跡第9・11・14次調査地点は鹿田遺跡の南東部に位置し、各調査地点は東西方向に並ぶ。全体で東西約150m、南北約50mの範囲を占める。同地域に広がる弥生時代後期～古墳時代初頭の水田関連遺構は、鹿田遺跡が所在する岡山平野の旭川下流域において最南端の位置にあたる。こうした条件下の水田遺構は、当時の地形復元の手がかりとなると同時に、臨海部の小規模集落の生業を考える上でも重要であり、ここで、その概要をまとめることとする。第9・11次調査地点の東側に接する第14次調査地点の成果については、正式報告（岩崎他2014）後の検討から、一部修正も加えて、ここで改めて評価したい。

(1) 水田の特徴

検出された遺構は畦畔と溝、そして周囲に溝をもつ円形状の高まりである。それらの上部には＜7層＞＜6層＞の堆積が確認される。特に、中世前半期にあたる＜6層＞の形成に伴う影響を受けて＜8層＞の一部削平が進行したため、水田の特徴を比較的良好にとどめるのは＜9層＞上で検出された遺構群となっている。よって、弥生時代後期～古墳時代初頭にあたる同段階を中心に、一部＜8層＞への変化を加えながら説明することとする。

a. 水田区画の復元－畦畔と溝－

畦畔と溝の位置から水田の区画を復元してみよう（図1）。両遺構を、以下の三方向にまとめて特徴を述べよう。

【**東西方向ライン**】 東西方向の畦畔あるいは溝のラインとして2列が抽出される。北側のラインを構成するのは第11次調査溝1（以下、S11－溝1と記す場合あり⁽¹⁾。他も同様）である。一方、南側ラインはS14－溝1からS11－溝2および両溝に沿って検出されたS14－高まり3とS11－畦畔1 c・同3とで構成される。

＜9層＞では、北ラインのS11－溝1 aは、CEラインからS11－畦畔1 aの北端を抜けて東側の第14次調査地点に入り、同調査区の北壁を17ライン付近まで走る。そして、調査区外の北東に向かうことが確認される⁽²⁾。長さは50m以上である。また、南ラインのS11－溝2は、溝の西端が位置する26ライン付近からやや方向を南に振りつつ西に向かい、第12次調査地点の東西溝に続く可能性が高い（山本2001）。その結果、長さは140m以上におよぶことが予想される。この南側と北側ラインの間隔は、本調査地点において30～35mである。

【**北東－南西方向と南北方向ライン**】 前述した南側と北側の2条の溝間を、南北方向あるいは北東から南西方向に区切る畦畔3列が確認される。東からS11－畦畔1 a・1 b、S9－畦畔6・7、S11－畦畔11・12のラインである。畦畔1以外は畦畔脇に溝を伴う。畦畔の間隔は、東側が43m前後、西側は43～55mを測る。これら畦畔は＜9層＞の高まりで形成されるが、S11－畦畔1 a・1 bでは＜8層＞が合体した状態を見せる。また、S11－畦畔1 cと同一溝2、そしてS11－畦畔8 cと同一溝16の位置関係は、畦畔と溝が平行するにもかかわらず、両者間に若干の間隔が形成されている。これは、本来は畦畔に接するものであったものが、溝の埋没後、畦畔の一部が加工され幅を狭めたと理解される。こうした点から、畦畔の多くは一部で加工されつつ＜8層＞段階に継続すると考えられる。

【**北西－南東方向ライン**】 北側と南側の両ライン間を北西から南東方向に区切る2列の溝・畦畔ラインが確認される。東側では、＜9層＞のS14－溝3と＜8層＞の同一溝2であり⁽³⁾、西側では、S9－溝8 a、そしてS9・11－畦畔8～10とそれに伴う溝のラインである。S14－溝3は、第14次調査地点の北西コーナー部分でS11－溝1 aに取り付く可能性が高い。また、その南東端はS14－溝1と結合するかどうかは確認できないが、東西ラインを形成するS11－溝1とS14－溝1をつなぐ位置にあることは明らかである。S14－高まり2は、S14－

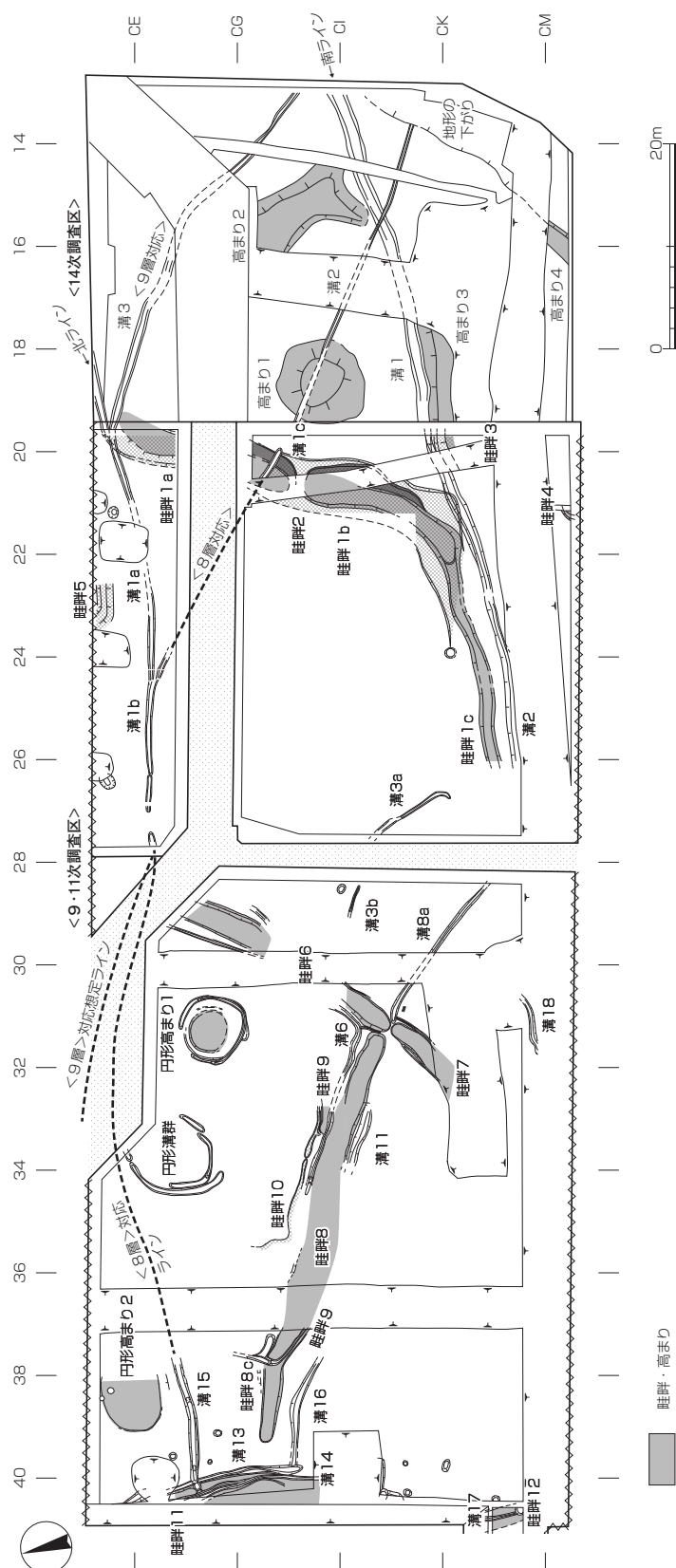


図1 弥生時代後期～古墳時代初頭の水田関連遺構 (縮尺1/700)

溝3に係わる畦畔を構成した可能性も考えられるが、位置がやや離れすぎている点や他の畦畔に比べて大規模で不整形な点には畦畔としての機能に疑問が残る。同溝は<8層>段階には埋没している。それに対して、同層に対応するのがS14-溝2である。同溝はS14-溝3に平行している。S14-溝1・高まり1上を通過してS11-溝1cへと向かい、同じく<8層>検出のS11-溝1bにつながる方向を示す。こうした状況から、<9層>から<8層>にかけて、S14-溝3が西側に13～15m移動して同-溝2が形成されたと考えてよからう。

【水田面の規模】 以上、三方向の区画ラインを説明したが、それぞれが独立しているわけではない。南北方向のS11-畦畔1はCKライン付近で西側に屈曲して南側の東西ラインを形成する。また、S9-畦畔6・7と同一畦畔8・溝8は直交しており、その結合部では水口が確認される。

こうした<9層>対応の畦畔や溝のラインから抽出される水田は、高さ0.15～0.2m・幅2～5mの規模を有する畦畔1a・bや同6～8の大畦畔によって、大きく区切られた南北3面・東西3～4面の配置が復元される。一筆の大きさは、残存状況が良好な西側の二面では、南北30～35mと東西45～50mの数値に収まる。東側の一面については、地形が高くなる第14次調査地点で三角形の形状をなしており、その内部に「高まり部」が広い割合を占めていることから、本来水田面として機能していたかどうかについてはやや疑問を残す。

さらに、この大区画の水田内は細分されていた可能性が、一部の遺構から想定される。具体的にはS9-溝3・18そしてS11-畦畔4・5がその候補となろう。これらは、近接する大区画ラインから7～10m程度の距離を保った位置に検出されている。畦畔の規模は幅0.5～1m程度であり、大畦畔とは明瞭に区別される。こうして区切られた水田の中で、S11-畦畔1とS9-畦畔6、S11-溝1と同-溝2、そしてS9-溝8で区切られる水田面は、東西約40m・南北30m前後の長さから約1,200㎡の面積が求められる。その内側に位置するS9-溝3で細分すると南北幅は約10m間隔で三面の分割が予想される。また、溝3の南端が若干屈曲している点を積極的に評価すると、東西方向では20m間隔で二分割の可能性も考えられる。その結果、細分された水田一筆の面積は200㎡程度が予想される。

b. 地形と円形高まりの配置

本地点の地形は、<8層><9層>の両層とも、北側～東側が高く南側～西側が低い傾向をもつ。水田面の高さは、<8層>では前者は標高0.8～1m、後者は標高0.5～0.6m、そして<9層>では同0.7～0.9mと同0.5m前後を測る。特に西側での傾斜が強い。水田形成に際して上面が加工された結果ではあるが、地形に沿っていることも確かであろう。

こうした地形は溝の傾斜からも確認される。第14次調査地点では、いずれの溝も傾斜が極めて緩い。それに対して、第11次調査地点では、西あるいは南に向けて強い傾斜を有する場合が多い。例えば、S11-溝1bでは、13ラインから24ラインまでが標高0.68から0.63mの低下に対して、27ラインでは同0.47mまで下降する。S11-溝2でも、第14次調査区内では標高0.45m前後であるが、第11次調査地点では同0.42mから同0.34mまで下降しており、第9・11次地点における西側への傾斜の強さを示す。また、調査区西端に位置するS11-溝13・14では、南側への傾斜が明瞭に確認される。こうした状態は、比較的高くて安定した地形が広がる第14次調査地点と、西側あるいは南側に向けて土地が下降する第9・11次調査地点という地形の違いを反映したものと理解される。

こうした地形のなかで円形高まりの位置をみてみよう。同遺構は、溝のみの痕跡（S9-円形溝群）も含めると4箇所を確認される。第9・11次調査地点に3箇所、第14次調査地点に1箇所である。前者の配置は北側の微高地から南側に向けて地形が下降する位置にあたる。後者の高まりは、S11-畦畔1とS14-溝1・3で囲まれた三角形の水田プラン内にあることに注目すると、地形的には比較的高くて安定的な地点ではあるが、こうした不整形の水田区割りから、やや起伏を有する状態が予想される。このように、円形高まりは、高い地形から下降する地形の変換部あるいは起伏をもつ位置に形成されたと理解される。本遺構の性格を考える上では、そうした地形の影響も考慮する必要があるだろう。

(2) 百間川原尾島遺跡水田との共通性

鹿田遺跡が立地する旭川下流域において、弥生時代後期の水田遺構が広く調査されているのが岡山市百間川遺跡群である。その中には、本地点の水田と共通する要素が数多く認められる。百間川原尾島遺跡では、40～30m程度の大畦畔区画内が小畦畔によって幅5～10mの水田に細分され、平均的に60㎡前後、広い場合は400㎡に及ぶ水田一筆の面積が確認されており、前述した本地点の水田規模等の形態はその特徴の中に包括される。また、円形高まりについては、同遺跡の水田に伴う「島状高まり」に共通性が求められる。同遺跡では、円形・不整形など複数の形態と土手状の形態が報告されている。それらの立地は微高地縁辺あるいは微高地上であり、機能については確定的ではないが、円形あるいは不整形のものに対しては水田形成に際しての掘削残存部と解釈される場合のほか、土手状のものは畦畔機能が想定されている（高畑1984、柳瀬1996）。この土手状の高まりは、その規模から本地点で確認される大畦畔に対応すると考えられる。また、その立地や形状に共通する部分が多く、同様の性格と考えて差し支えないであろう。

以上のように、本地点の水田は、本地域に広がっていた当時の水田形態の特徴を備えたものであるといえよう。

(3) 鹿田遺跡の集落と水田

本調査地点で水田の広がりが確認されたことから、鹿田遺跡の弥生集落は居住域と水田域で構成されることが判明した。同集落の始まりは弥生時代中期後半に遡る。後期には集落範囲を拡大し、古墳時代初頭に終焉を迎える。その中で、第9・11次調査地点で検出された水田の時期は後期～古墳時代初頭であり、まさに集落が拡大し継続する時期に対応する。集落開始期である中期後半の水田については、現状では確認できていないが、本地点の周辺部で検出される可能性は十分に予想される。今後の発掘調査成果を待ちたい。

居住域と水田の位置関係はどうであろうか。弥生時代後期の居住域は第1次～2次調査地点に求められる。水田を形成する本地点は、同地点が示す居住域から南に100m前後の場所に於ており、集落と水田の位置関係は北に居住域、海に向かう微高地の南側縁辺が水田域となる。それに対して、古墳時代初頭には活動域は本地点の南側に位置する第12次調査地点に広がる（山本2001）ことから、水田の位置は集落の縁辺から集落内へと変化する。こうしたことから改めて鹿田遺跡の敷地内での地形を見直すと、本地点に形成された水田は、微高地間に広がる南北幅60m～70m程度の緩やかな窪地状の場所が選択されていたと考えられる。

鹿田遺跡に展開する弥生集落は小規模な集落である。その中で、本地点の水田の存在は、これまで報告されている土器製塩などの手工業生産だけでなく（大久保1988、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター2016）、稲作も含めた総合的な生産活動が行われていた状況を指し示している。当時の集落における生産活動を考える上で貴重な資料といえよう。（山本悦世）

註

- (1) 第9次調査と第11次調査の遺構は通し番号で報告している。
- (2) 岩崎他（2014）では記載されていないが、北壁面の8層がそれにあたると判断される。
- (3) 岩崎他（2014）では、溝2と近接して走る溝5～7について、同一面で同時期に形成されたと想定していたが、その後の検討から、同溝群は上層である<7層>へ属する可能性が高いと判断することとなった。そのため、同位置における<8層>対応の溝は溝2のみと、ここで訂正する。

参考文献

- 岩崎志保他 2014『鹿田遺跡8』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第29冊
 大久保徹也 1988「鹿田遺跡の製塩土器」『鹿田遺跡1』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊
 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 2016「弥生ムラの構造」『吉備の弥生時代』吉備人出版
 高畑知功 1984「水田遺構」『百間川原尾島遺跡2』岡山県埋蔵文化財調査発掘調査報告56
 柳瀬昭彦 1996「弥生水田の展開」『百間川原尾島遺跡5』岡山県埋蔵文化財調査発掘調査報告106
 山本悦世 2001「鹿田遺跡第12次報告」『岡山大学構内遺跡調査研究年報18』